西照

西照寺寺報「さいしょう」
第２３号
2009年１月４日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
HP　http://nisitera.eek.jp

御正忌報恩講　勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

一月十五日（木）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
十六日（金）午前九時半（満日中）～

布教使　十五日（逮夜）杉谷淳志　師
南砺市城端町　瑞泉寺）
十五日（初夜）十六日（満日中）林　史樹　師
高岡市伏木　要願寺）

西谷山　西照寺

支えあういのち

佐賀のがばいばあちゃん

毎月本願寺から「仏教こども新聞」というのを送ってきます。昨年の五月号でしたか「佐賀のがばいばあちゃん」（徳永サノ）の言葉が紹介されていました。

おはよう、と言えたら　すばらしい
こんにちは、と言えたら　カッコいい
いただきます、と言えたら　絶好調！
ありがとう、と言えたら　天才だよ。

という言葉です。

ちょっとおもしろいなあと思いました。私たちが、普段「カッコいい、すばらしい……」と思うこととはかなり違っているからです。

どんなおばあちゃんだったのだろうか。興味がわいてきました。

まだ、本屋にならんでいるだろう。

（中面に続く）

五百万部突破

最初その本を見て驚いたのは、帯封に「おかげさまで５００万部突破！」と書いてあったことです。どうしてこんなに売れているんだろうか。タレントの島田洋七（徳永昭広）さんが自分を育ててくれたおばあちゃんの思い出を綴った本で、面白い。ただそれだけでこんなに売れるものなのだろうか。不思議です。

そう言えば以前、綾小路きみまろさんが、「笑い」というのは、ただおもしろいということだけではなくて、そこに「真実」というものが込められていないと伝わらないし、受け入れてもらえない、というような話をされていたのを思い出しました。

この本にも、ただ面白いということだけではなくて、人々を引きつける何か「真実」が語られているに違いない。

その五百万部突破の言葉に釣られて、買ってしまいました。

読んでみた私の感想は、私たちが忘れかけている何か大切なものを伝えようとしてくれているような気がしました。だから売れているのでしょう。

伝えたかったこと

私が感じたのは、次の二点です。

一つは、「貧乏は、不幸ではない」ということです。

確かに、お金が儲かれば、物が豊かになれば、幸せになれるような気がします。しかし、幸せのもとがそれだけだと思ってしまうと、お金がないことや旅行に行けないこと……が不幸なことのようにしか受け止められません。今の状況をどのように受け止めていくかは、私の心のあり方（心の豊かさや知恵）の問題です。

サノばあちゃんは、創意工夫をしながら生活をしていて、かつ、暗くない、ユーモアがある。

「貧乏には二通りある。暗い貧乏と明るい貧乏。うちは明るい貧乏だからよか。それも、最近貧乏になったのと違うから、心配せんでもよか。自信を持ちなさい。うちは先祖代々貧乏だから」

と言われていた。

昭広さんが小学校低学年の時、時折学校で栄養調査が行われたそうです。数日続けて伊勢エビの味噌汁や焼いたのを食べたと書いた。すると、うそをついているのではないかと不審に思った先生が、ボロボロの家に訪ねてきた。

そのとたん、ばあちゃんはアハハハハと笑いだしたのである。

「先生、すみません。あれは伊勢エビじゃなくてザリガニです。私がこの子に、伊勢エビていうてたけん……」

と、ザリガニを伊勢エビに変えてしまうような知恵とユーモラスさが伺える話も紹介されていました。

二つ目は、昔は貧乏だったけれども、互いを思いやり、支え合い、助け合う関係があった。改めてそのことの大切さを感じさせられた点です。

昭広少年が小学生の六年間、担任が変わっても、運動会になると先生が「自分は腹が痛いので食べられん」と言って、豪華な先生の弁当を食べさせてくれた話。

貧乏で売り物にならない崩れた豆腐しか買えなかった昭広少年。崩れた豆腐がない時は何度も豆腐屋のおっちゃんが、分らんようにグニャッとつぶして、崩れたのがあったと安く売ってくれた話。

サノばあちゃんの家に明け方泥棒が入った。「今から仕事だから、夕方おいで」といって、夕方来た泥棒におにぎりをあげて、まじめに仕事をするよう諭した話。などが印象的でした。

いのちの底辺を支えるもの

人は一人では生きられません。自分のことをかけがえのない「いのち」と尊重してくれる。また、相手にもそれを感じる。そういう無条件の愛情と思いやりの関係の中で、自分の「いのち」は支えられ、安心して生きていけるのだと思います。それが、家族であったり、友人、仲間、隣近所……であったりするわけです。いのちを底辺で支え合う関係です。

しかし、社会は違う一面でも動いています。特に今日のグローバル経済は、過当競争のなか、人間を限りなく商品化していきます。商品化というのは、人間一人ひとりを無条件に、かけがえのない「いのち」として見ていく視点ではなくて、取り換え可能な部品にしていく発想です。商品価値のある有能な能力のある人間が評価され、そうでない人間は、いらなくなったら簡単に切り捨てられていく。どうやったら商品価値が高められるか。そうでなかったら捨てられる。そのために勉強をして、いい学校を出て……。条件付きの愛情と思いやりです。

そういう社会の価値観で、人間の底辺を支える関係まで推し量っていくと、人間の「いのち」が壊れていくような気がします。

そんなことを感じさせる事件が幾つかありましたが、昨年七月に、埼玉県で中学三年生の女の子が父親を殺すという事件が報道されていました。父親に勉強しろと言われ、学校の成績に対して厳しかったことが、その動機のようでした。勉強することは大切なことですが、成績によってその人間を評価していくことは、人間を商品化していく視点に繋がっていきます。その物差しで「いのち」をはかると壊れていく。むしろ、成績にかかわらず、無条件にあなたを大切に思い、尊重していることを伝えていく必要があるように思います。

（裏面に続く）

お父さんも、ただお金を稼いでくれるというだけで、尊重され、大切にされるならば、つらいものがあるのではないでしょうか。

仏の智慧と慈悲

私の「いのち」は、無条件の愛情と思いやりによって支えられています。私たちにとって、そう気づくのは家族などのごく限られた範囲の中でですが、それが無限に広がっていることに気づいた方を「仏」といいます。

仏教の智慧とは、基本的には縁起の法に気づくことです。縁起とは、人は一人で生きているのではなくて、いろいろな人や物との関わりのなかで生きている。無限につながっているいのちに気づくという一面があります。親鸞さまの言葉でいえば、『一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり』（歎異抄）という表現になります。私に危害を加える人も、関係なさそうに見える人も、みんな父母兄弟のような深い繋がりの中で生きてきた。そう気づくとあらゆる命を無条件に尊重し、思いやる心がわいてくる。それが慈悲（無条件の愛情）ということです。その慈悲の精神に立って生きることの「真実」を仏教は教えているわけです。

おはようがなぜすばらしいのか

お互いの「いのち」が無条件の愛情と思いやりによって、支え合っているという関係を確認し合うのは、基本的には「言葉」だと思います。言葉を通して、相手にそれを伝え、また相手も私に伝えてくれる。だからサノばあちゃん、おはようと言えることがすばらしくて、ありがとうということが天才だと言ったのだと思います。「ばかやろう」では、それが伝わっていきません。

私たちは、人間の商品価値を高めることが、すばらしいことやカッコいいことのように思いがちですが、人間のいのちを支える精神を確認する「言葉」が大切だとサノばあちゃんは言ってくれた。そこに仏さまの精神を感じることができます。

サノばあちゃんは、寺に熱心に通った念仏ばあちゃんであったと聞いています。サノばあちゃんの心の豊かさや力強さは、仏さまの精神からいただかれたものかもしれません。（文責　住職）

※お知らせ

来る四月二十一日　西本願寺新門様が高岡教務所（西本願寺高岡会館　高岡市東上関四四六）へ御巡回になられます。その折、帰敬式（おかみそり）が執り行われることになっております。御希望の方お知らせくだされば、詳細が決まり次第お知らせいたします。